POSA 事業報告

Project
Operation
Sight for
All

No. 12

●平成20年度

POSA
BANGLADESH－JAPANESE FOUNDATION

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

POSA 目　次

理事長の言葉

『与えれば、与えられる』
POSA 理事長　医療法人輝秀会理事長　倉富　彰秀 ……………………………… P1

理事より

バングラデシュの子供たちが歌う「ふるさと」
POSA 副理事長、菊池眼科院長　井上　望 ……………………………… P3

ライオンズクラブより

「与える喜び」を思う　神埼ライオンズクラブ会長　吉原　俊樹 ……………………………… P5

アイキャンプ参加者より

「バングラデシュでのボランティア活動」
たかはし眼科院長　高橋　雄二 ……… P7
「アイキャンプを終えて」　自治医科大学附属病院　眼科医講師　堀　秀行 ……… P8
「アイキャンプに参加して」　自治医科大学附属さいたま医療センター　高橋　身奈 ……… P10
「バングラデシュからのスタート」　井上　麻記 ……… P12
「バングラデシュの旅を終えて」　高橋　美穂 ……… P13
「バングラデシュに行って」　高校一年生　高橋　鉄平 ……… P14

平成 19 年度事業報告及び平成 20 年度事業計画

平成 19 年度・平成 20 年度事業報告書 ……………………………………………… P15
御支援を頂いた方の一覧表……………………………………………………………… P16
POSA 理事・監事名簿・POSA 名誉会員・POSA 規約（一部抜粋）・入会のお願い…………………… P17

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

『与えれば、与えられる』

POSA 理事長　医療法人輝秀会理事長
倉富　彰秀

　先日、京都の講習会に行った。時間があったので定番の清水寺に行ってみた。清水寺のすぐそばに二条坂という細い道がある。
　ここに、この言葉があった。
　『城たいが』というらしい。妙に盛り上がっている店があったので、なんとなく覗いてみたら珠玉の言葉の数々が本になったり、しおりになったり、キーホルダーになったり、コーヒーカップになったり……
　一冊本を買って、帰りの新幹線でぱらぱらと捲ってみた。いくつか好きな言葉があったので、今回は出してみたい。

　『人をけなせば
　　人からけなされ
　　人を笑えば
　　人から笑われる』

　これは、はっとしたのでコピーしてうちの下の娘の机の上に置かせている。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

　さらに、もう一つ。

『大雑把

　いいかげん

　粗末は人を遠ざけ

　しっかり素朴は

　人を引き寄せる』

　これは、くらとみ眼科のスタッフにぜひ見てもらいたいと思い、ミーティングルームのボードに大きく書いている。

　最後に、いつも思っている事を城たいが氏も書かれていたので、ここに示したい。

『出来ないと思えば

　出来なくなり

　出来ると思えば

　出来るようになる』

バングラデシュの子供たちが歌う「ふるさと」

POSA 副理事長　菊池眼科院長　井上　望

POSAアイキャンプも七回まではインドに行っていました。インドでの活動を終えてカルカッタ空港を離陸する飛行機の中では毎回「今年もきつかった。もう来年の参加は見合わせようかな……。」と思ったものでした。患者さんの喜ぶ顔を見るのは本当に嬉しいのですが、その喜びを上回る労力を要しました。しかしインドとは不思議な国で、日本に帰ってしばらくするとまた行きたくなるのです。私はあの貧しい人々の中にあるエネルギーに何とも言えない魅力を感じていました。本場のインド料理もまた私を再びインドへと呼び戻す材料となっていました。インド人の宗教の８割は生まれ変わりを信じるヒンドゥ教です。その教えは現世をしっかり生きれば素晴らしい来世があるとしています。インド人は良い来世を迎えるために他人を押し退けてでも現世を必死に生きようとしています。

８年前から活動の場をバングラデシュに移していますが、バングラデシュの人々の大多数はイスラム教徒です。イスラムの戒律では、アッラーが森羅万象を司っていると考えられています。自分が白内障で見えなくなっている事、我々が手術をして自分が見える様になった事など、バングラデシュの人にとっては自身にあるすべてが神のお導きで、神に感謝をもって生きています。そのためと思われますがバングラデシュの人々はインド以上に困難な生活環境に置かれているのにさほど悲壮感は感じません。私たちの目からみれば、寡黙で感情を表さないけれども優しい国民です。

手術のお手伝いをしてくれるエンゼルホームの子供達も現地の大人と同じ優しい目をしています。毎年ささやかな歓迎会をしてくれますが、よく日本の歌を合唱してくれます。今年は唱歌「ふるさと」を

歌詞も見ずに歌ってくれました。私たちも一緒に歌いましたが日本人でも「うさぎ追いし」を「うさぎ美味し」と思っている子供が多い状況ですから、私たちも歌詞の３番までは完全には歌えませんでした。「ふるさと」を見事に歌う純朴な子供たちを見ていると、かつて日本人が持っていた古き良き精神を思い出させてくれます。この子供たちの目を見るのが、バングラデシュに私が引き寄せられる理由の一つになっています。そしてダッカ空港を離陸する時には毎回「今年も充実していた。来年も楽しみだな」と思いながら活動を続けています。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

「与える喜び」を思う

神埼ライオンズクラブ会長
吉原　俊樹

あるライオンズクラブ式典であいさつの機会があり、ライオニズム（ライオンズの精神）とキリスト教の「与ふるは受くるより幸ひなり」の言葉を取り上げ、その結びつきを説いたところ、倉富医師が共感され、私共の在り方を考える機会がありました。

このくだりは聖書（使徒20・35）に書かれている言葉です。これは、受ける喜びより、与える事によって他者の役に立ち、感謝される喜びのほうがどれほど大きいか。それこそ、人間本来の生き方である。とあります。そういえば、皆さんも体験があるのではないでしょうか。

ドイツの作家であるヘルマン・ヘッセも「愛する事が愛されるより幸せ」と言っています。

「give and take」もgiveが先にあります。

倉富医師はアイキャンプに強い使命感を持ち、賛同するスタッフとともに「与える喜び」を長年実践され、「使命感を持てる人生ほど、人間幸せな事はない」との崇高なる精神にて取組まれておる事でしょう。

宗教の如何を問わず、隣人愛とは全ての人に対して、特に悩める人、苦しむ人に対しても愛情を注ぐ事であり、隣人愛の具体的行動が「奉仕」とあります。

ライオンズクラブのモットーは「ウィサーブ　我々は奉仕する」です。

ライオンズクラブ国際協会は、1925年第９回大会にてヘレン・ケラー女史から「ライオンズよ盲人の騎士たれ」の直訴を受け、とくに視覚障害者への奉仕活動に力を入れております。

倉富医師が行うアイキャンプは神埼ライオンズクラブ事業として私どもメンバーの誇りである事はもちろんの事、日本レベルでも数ある奉仕事業の中でも、とくに光輝くものです。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

今、私たちはこれまで築き上げてきた社会構造や価値観の見直しを迫られているような思えてなりません。生きるとは、家庭とは、地域社会とは、といった人間にとって根源的なことを私たち一人ひとりがあらためて考えるときを迎えてきていると強く感じます。

このような中、このアイキャンプは強い提言と人としての指針が奥深く感じさせられます。

倉富医師をはじめアイキャンプスタッフへの心から敬意を表し、あわせて、さらなる事業発展を祈念申し上げます。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

バングラデシュでのボランティア活動

たかはし眼科院長　高橋　雄二

2007年12月26日より12月31日まで、POSAの活動に参加させていただきました。前回の参加の時と違って、今回は、バングラデシュの文化にも触れたいという気持ちがありました。前回参加したときも感じたのですが、この事業を永続してやってこられたのは倉富先生、井上先生、また、国際エンゼル協会の方々のご努力は、たいへんなものだと思います。１年や、２年で終わるのならともかく、今回でバングラデシュだけでも８回目となる活動はとてもエネルギーのいることだと感じています。

今回バングラデシュをよりよく知ることができたのは、ある１冊の本のお陰です。その本とは、国際エンゼル協会の現地責任者アジズル・バリさんらがお書きになった本（天使の舞い降りた国から：アートヴィレッジ発行）です。それをサイン入りで頂きました。カラー写真中心のきれいな本です。印象に残ったのは、バリさんが、日本人は、センス・オブ・ビューティーに基づくサービスは世界一だ、と書いておられる文章です。詳しくはこの本を読んで欲しいのですが、こういった日本人のすばらしさは欠点も含めて、バングラデシュのような日本と利害関係がほとんど無い外国の方から見ないと気がつかないと思いました。また、この本全体から受ける印象ですが、バリさんのやさしさを感じて心が温まりました。

今回、高校生の次男を連れて行きました。前回訪問した際に受けた歓送迎会での孤児院の子供たちの笑顔や、礼儀正しさが印象に残っていたからです。次男は私が開業している手前、言葉には出しませんが、将来医師になるべきだとプレッシャーを感じているようです。学業が伴わないのでなおさらです。私としては、自分の職業を継いでくれるとうれしいという気持ちがある一方で、自分にとって何をするのが一番向いているかを考える上で、一つの経験材料として今回のボランティア活動を経験してもらいたいと思って連れて行きました。実際にはあまりボランティア活動らしいことや、子供たちとの触れあいはできなかったようですが、本人に聞くと、日本とは異なる漠然とした暖かいもの、おそらく現地の方の素朴さや、やさしさなどをバングラデシュで感じてくれたようです。これから折に触れて少しずつ感じたことを聞いてみようかな、とも思っています。次回は、国際エンゼル協会が主催しているトイレ作りに参加させて現地の方にも本人にも身のある体験をさせたいと感じております。

最後になりましたが、航空券の手配などで、たいへんお世話になった井上先生、また、今回も快く参加を引き受けてくださった倉富先生に厚くお礼申し上げます。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

アイキャンプを終えて

自治医科大学附属病院講師　堀　　秀行

POSAによるバングラデシュでのアイキャンプは、今回で４年連続での参加である。

年の瀬が押し迫る平成19年12月26日、勤務先である病院の業務を済ませ、関西国際空港に向かった。４年連続の参加ではあるが、参加者の顔ぶれは毎年異なり、今年の後半組の参加は、POSA副理事長の井上先生とご一家、そして、４年前、私にアイキャンプへの参加を勧めていただいた、高橋先生とご一家、そして自治医大大宮医療センターから初参加の視能訓練士の高橋さんである。

バンコクで、飛行機を乗り継ぎ、27日の午後、無事にダッカ国際空港に到着した。時間のかかる入国審査を済ませ、荷物を受け取り、一歩空港の外にでるとそこは砂塵と喧騒が渦巻く別世界ある。すでに見慣れた光景であるがバングラデシュに着いたことを実感する瞬間である。３年前に、この雑踏の中、１時間程スーツケースを預かったまま一行とはぐれてしまい途方に暮れていたことを思い出す。到着ロビーには、おそらく長く待ったであろうバリさんが、笑顔でわれわれを出迎えてくれた。ここからは、車での移動である。走行距離22万キロのハイエースで、初参加から同じ車である。それにしても、バングラデシュの悪路をよく走るものだと感心しつつ、コナハリ村のエンゼル協会に到着すると、子供たちが、小さい順に整列し、拍手と花飾りでわれわれの到着を出迎えてくれた。

しばし休息の後、翌日帰国予定の前半組の倉富先生とご一家から、手術室を引き継いだ。会議室程度の広さの部屋を利用した手術室であるが、そこには、堂々２台のツァイス社製の顕微鏡と、テレビモニター、そして今年初めて、DVD-Rによる手術の録画装置が備えられていた。手術は、現地のボリューム・サージャンでいらっしゃるミジャン先生と、日本からのDr.が並列で手術ができ、手術の様子がモ

ニターを通じて、部屋の外からも見学することができるようになっている。

白内障の手術は、混濁した水晶体を取り除き、人工のレンズに取り替える手術であるが、日本では水晶体を超音波の器械を使用して眼内で破砕して吸引するのが一般的な方法である。傷が小さく、傷口や視力の回復が早いという利点があるからである。しかし、バングラデシュでは、水晶体の核と呼ばれる一番硬い部分を丸ごと取り出す方法が一般的である。そのためには眼球を大きく切り開かなければならない。当然、術後の乱視が強くなるし傷口の回復にも時間がかかる反面、高価な器械を必要としないという利点がある。ミジャン先生は、傷口の作り方と、核の取り出しかたに工夫を凝らし、糸で傷口を縫わなくてもいいように手術されていた。１日に何十人も手術しなければならず、糸などの医療資源が貴重な国柄を反映しているのであろう。眼科医として、大変参考になる術式なので録画したDVDを日本に持ち帰ったが、日本のプレイヤーではうまく再生できず、残念であった。手術は計３日間行い、無事に終了することができたが、最終日に、次のようなやりとりがあった。ミジャン先生の患者さんの麻酔の際に、眼球の後ろに出血する合併症を起こし、予定していた手術ができない患者さんがいた。ミジャン先生が、家族を呼び、患者さんと家族に事情を説明し、“手術は後日、自分の病院で無料にておこないます”と約束すると、患者さんの方から“せっかくの手術で先生にご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。”という返事がかえってきたそうである。宗教や医療制度の違いはあるものの、お互い信頼してないと生まれないやりとりであり、大変感銘を受ける一幕であった。

今回のアイキャンプでは、バリさんの実家に招いていただくという貴重な体験をさせていただくことができた。バングラデシュでの４日間はあっという間に過ぎてしまったが、普段あたりまえだと思っていることを見直すよい機会であったと思う。また、新しい発見を求めて今後も積極的にアイキャンプの活動に加わっていき、社会貢献を果たしたいと思う。

最後にPOSAのみなさま、アイキャンプに参加されたみなさま、バリさん、前田さんをはじめとするエンゼル協会のみなさま、お世話になりありがとうございました。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

アイキャンプに参加して

自治医科大学附属さいたま医療センター
高橋　身奈

発端は2007年４月、職場の自治医大さいたま医療センターに竹澤美貴子医師が赴任してこられたことです。先生からアイキャンプの話を伺った私は、視能訓練士でも参加したら何かできることが有るか質問しました。すると白内障手術をするから超音波検査等を手伝えるのではないかとのこと。興味を持ったので参加できるか、自治医大本院の堀先生を通じて問い合わせて頂きました。

参加できることになったものの、場所がバングラデシュということで、職場の皆様はそれはもう色々心配して考えてくれました。というのも二年前に旅行で行ったカンボジアで赤痢菌を持って帰国したらしく、帰国後発症し仕事を三週間ちかく休んで大迷惑をかけたという前科があった為です。まず日程をみて期間の長い前半組で行くのはリスクが増すから後半組なら良いという判断。現地の水事情が心配だから水を沢山持参しろという助言。蚊に二回以上刺されるなというデング熱を心配した助言。食事を心配した同僚から貰ったカロリーメイトのお餞別。以前参加経験のある竹澤先生からはもう少し実際的なアドバイスを頂戴し、出発日を迎えました。それまでにもメールでＰＯＳＡ事務局の方々や井上先生、堀先生に助言を頂き準備万端で望むことができ感謝しております。

現地到着後滞在先のエンゼル協会の人々に暖かく迎えていただき「いよいよだぞ」という緊張感が生じました。今回の私に与えられた役割は手術の外回りと術後診察時の屈折検査でした。現職に就いてからというもの手術室に入った経験は皆無に等しかった私はさすがに不安を覚え出発日前日、科長の梯先生と竹澤先生にお願いし白内障手術の見学をさせて頂きました。お陰様で多少（？）流れと雰囲気を知

ることができ不安も軽減したように思います。

　さて現地では看護師である倉富先生の奥様にご指導頂き慣れない手つきで危なっかしい動作に注意を頂きながらなんとか一日目を終えました。手術道具の扱いや滅菌の仕方など、ほぼ全て無知の領域に新鮮であると同時に責任と、日本の手術室で働く人々や医療材料を扱う人々の偉大さを感じました。

　二日目は私と医師の二人で手術の外回りをしましたが何とか無事終えることができました。現地の方の白内障はおおむね全員がかなり進行した硬そうな白内障で、それを手術する先生方の技は素晴らしいものでした。

　三日目術後の患者さん方は屈折をチェックし診察をうけ、保護眼鏡と点眼薬とタオルを受けとり帰られました。

　以上がアイキャンプの核の部分なのですが、その他個人的にチャレンジだと考えていたことがあります。それは食事。日本のカレーとは異なるが、しかし。「三食カレー」と言われていたカレー苦手の私はどんなことになってしまうのだろうと思っていました。でも案ずるより産むが易し。三食毎回美味しく頂きました。食後の甘いチャイも懐かしい思い出です。

　この度このような得難い体験ができ大変感謝しております。今後もこの活動が継続され沢山の方が関わって何か気付きが得られたら素敵だなと思いました。ありがとうございました。

追記：水は「侍」というミネラルウォーターが有るので心配無用でした。蚊取り線香に蚊帳付きベッドもあり、エンゼル協会のゲストハウスは大変有難い施設です。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

バングラデシュの旅を終えて

高橋　美穂

「人生観が変わるよ」……これが主人に言われた言葉です。

40も半ばを過ぎ、今更それはないでしょう……と思いつつ初めて訪れたバングラデシュ。日本でのほほんと暮らしていた私にとって人生観が変わる何かがそこにありました。

飛行機を降りてダッカに着いた時は砂ぼこりでどんよりとした重い空。壁の向こうに群がる鋭い目の人々。物を乞う婦人。裸足の子供達などとまどうことだらけでした。正直「こわい」と思いました。

車に乗ってあまりの交通のすさまじさにしばし呆然としてしまいました。

でもそんな中で一生懸命生活している人々のパワーを感じることができました。日本人が失ってしまった何かがそこにはありました。

ただならぬ雰囲気を感じながらもエンゼル協会に無事到着。

可愛らしい子供達の歓迎を受け、ほっとしたのか私はその日はほとんどベットから動けず眠ってしまいました。

次の日からはダッカの町や田園風景の広がる田舎にも連れて行ってもらいました。そこでバリさんのご家族、親戚の皆さんにもお会いできとても暖かいもてなしを受けたこと、とても嬉しかったです。言葉は通じないけど本当の「もてなしの心」を教わった気がします。ここでも日本人が失いかけている物を再発見したような気がします。今まで一番印象の強い国として私の心に残っているバングラデシュ。厳しい環境の中で必死に生きようとする底力をもつ人々と仔鹿のような美しい瞳の子供達が今でもふと頭をよぎります。自分の無力さを嘆きつつ何かできることはないかと考えています。あの笑顔をそのままに本当に幸せになって欲しいと心から願う毎日です。

倉富先生御家族、井上先生御家族をはじめ一緒に行動を共にした皆様、お疲れ様でした。すばらしい想い出を共有できたこと、とても嬉しく思います。そして最後に出不精の私のおしりをたたいてバングラデシュまで連れていってくれた主人にも感謝したいと思います。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

バングラデシュに行って

高校１年生　高橋　鉄平

正直、僕はものすごい困っていた。ただでさえ家から外に出るのがあまり好きじゃない僕を、急に名前も知らないような国に連れていくと父が言ったからだ。行きの飛行機の中でも不安で胸がいっぱいだった。現地に着いて、バスでエンゼルハウスに向かう途中で、改めて日本との文化の違いに驚かされた。言葉じゃ言い表せない何かが、たくさんつまった国だと思った。エンゼルハウスに着くと、たくさんの子供たちが盛大に歓迎してくれた。みんな笑顔で日本人とは全く対称的な暖かさを持っているような気がした。その笑顔を見ているうちに心の不安があっという間に消えてなくなり、自分にも出来ることを精一杯やりたいという気持ちが強くなった。実際僕に出来ることは、ほとんどなかった。あったとすれば、患者さんの手をひいて誘導したり、手術道具を整理したり……。だけど、ほとんど何もしていない僕に対しても患者さんや、現地の子供達は、「ありがとう」と笑顔でお礼を言ってくれた。改めて、「ありがとう」という言葉の素晴らしさを実感した。一日、一日と時がたつにつれて、日本に帰りたくない、という気持ちが強くなっていった。バングラデシュには、今の日本に欠けているものが多くつまっていると思った。思いやりの気持ち、協調性、子供たちの輝く笑顔……。日本人も見習うべき点（改善すべき点）が多くあることを改めて実感できた素晴らしい機会だと思った。大人になったら必ず医者になって、今度は父のお供ではなく、僕がたくさんの人を笑顔にしてあげたいと思う。是非、このような機会を増やし、多くの日本人に僕と同じような体験をして、自分自身を見直す機会が増やせればいいな、と思う。また、バングラデシュの子供たちの笑顔を見に、行きたいと思う。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

平成 19 年度事業報告書

＜バングラデシュ眼科診察
　及びスクリーニングアイキャンプの実施＞

実施期間：平成19年4月1日から平成20年3月31日まで
実施場所：バングラデシュ国インターナショナル
　エンゼルアソシエーション（IAA）本部
　クリニック施設にて
派 遣 員：現地眼科医及び現地助手

＜バングラデシュアイキャンプの実施
　及びビタミン配布＞

派遣期間：平成19年12月23日から平成19年12月31日まで
実施期間：平成19年12月24日から平成19年12月29日まで
実施場所：バングラデシュ国インターナショナル
　エンゼルアソシエーション（IAA）本部
　クリニック施設にて
派 遣 員：

眼科医４名　倉富　彰秀　井上　望
　高橋　雄二　堀　秀行
看護師１名　倉富亜由美
視能訓練士１名　高橋　身奈
一般参加５名　小柳　孝博　小柳　ゆき
　井上　麻記　高橋　美穂
　高橋　鉄平

対象患者数：73名

活動内容

　今回バングラデシュアイキャンプも８回目となりました。現地の眼科疾患の症例調査及び800名の患者さんを対象としたスクリーニングアイキャンプ及び73名の白内障手術を実施し、近くの小学校にビタミンＡの配布も行った。

国内啓発活動

バングラデシュアイキャンプへの寄贈品、募金、参加の呼びかけ
バングラデシュの現状についての啓発活動
平成19年度事業報告書

平成 20 年度事業計画書

＜バングラデシュ眼科診察
　及びスクリーニングアイキャンプの実施＞

実施期間：平成20年4月1日から平成21年3月31日まで
実施場所：バングラデシュ国インターナショナル
　エンゼルアソシエーション（IAA）本部
　クリニック施設にて
派 遣 員：現地眼科医及び現地助手

＜バングラデシュアイキャンプの実施
　及びビタミン配布＞

派遣期間：平成20年12月20日から平成20年12月28日まで
実施期間：平成20年12月21日から平成20年12月26日まで
実施場所：バングラデシュ国インターナショナル
　エンゼルアソシエーション（IAA）本部
　クリニック施設にて

＜クリニック建設＞

神埼ライオンズクラブにより、現地にクリニックを建設する。ＰＯＳＡ有志の医師もライオンズクラブに寄付予定である。

実施期間：平成20年４月21日から平成21年３月31日まで
実施場所：バングラデシュ国ガジプール県カパシア
　郡ボリバル村

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

温かいご支援ありがとうございました。

平成19年4月～平成20年3月
敬称は省略させていただきます。（順不同）

寄　付　者

	芥川　泰生	国際ソロプチミスト佐伯	鶴田　遊山
	阿久津幸夫、静子	国際ソロプチミスト八代	松本　アヤ
	荒木　勝子	小森　啓範	松本　いく子
	小田　英夫	世戸　憲男	宮崎　絢子
	神埼ライオンズ	高塚　久嘉	牟田　環
	菊池眼科医院患者様一同	高山　マチ子	諸永　勝巳
	くらとみ眼科　窓口にて		
タオル	諸永　勝巳	牟田　環　　マスダ	宮崎　絢子
メガネ	諸永　日吉	廣瀬佳子（国際ソロプチミスト佐伯）	

POSA理事・監事名簿

理事長	倉富　彰秀	（医療法人　輝秀会　理事長）
副理事長	井上　望	（菊池眼科　理事長）
	今永　至親	（今永眼科　院長）
理事	楢本　純一	（ならもと内科医院　院長）
	野口　守	（萬永堂　代表）
	林　敢為	（介護老人施設グリーンヒル幸寿園　施設長）
	橘　光幸	（古物商　橘商事）
監事	末永　博義	（末永司法書士事務所　代表）
	田中　雅美	（田中雅美税理士事務所　代表）

（敬称略・五十音順）

POSA名誉会員

名誉会員	古川　康	（佐賀県知事）
	中尾　清一郎	（佐賀新聞社長）

（敬称略・五十音順）

POSA一般会員

㈱アステム	木原　豊	高橋　身奈	野田　郁男	松本　博
東　キヨ子	楠元　國公	橘　光幸	八谷　臨	㈱メニコン
伊崎　祐介	古賀　千春	田中　博都	羽生　友美	㈲毛利工務店
井上　望	小柳　博那	田中　雅美	林　敢為	森岡千鶴子
今栄　悟	最初美津子	田邊　樹郎	原　康夫	安谷久美子
今永　至親	財部貴資男	鶴田　遊山	樋口　英明	山崎　清二
宇野　光次	佐伯　陽子	出崎　蓉子	福岡　講一	山近　史郎
江口アキラ	境　和臣	中村イク子	福屋　育祝	吉武　繁利
大島　博	阪谷　洋士	楢本　純一	別次　宣史	与那嶺　豊
於保　實美	末永　博義	㈱日本点眼	堀　秀行	
㈱科研製薬	世戸　憲男	野口　守	松尾　隼雄	

POSA（ポサ）規約（一部抜粋）

（目的）

第３条　本会は、眼科衛生学に関する知識の普及及び白内障・緑内障に対する研究・ボランティア活動を行い、視覚障害者の減少に寄与することを目的とする。

（入会金及び会費）

第７条　正会員は、入会金壱万円、及び年会費壱万円を納入しなければならない。

POSA一般会員入会は随時受け付けております。ご連絡下さい。(POSA事務局)

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

孤児たちのお見送り

Project Operation Sight for All

ＰＯＳＡ事務局

〒 842-0002　佐賀県神埼市神埼町田道ケ里 2435-1

医療法人　輝秀会　くらとみ眼科医院

TEL : 0952-52-8841　FAX:0952-52-8765

ホームページアドレス　http://www2.saganet.ne.jp/posa/

E-mail アドレス　posa@po.saganet.ne.jp

2008 年 6 月発行